

小笠原諸礼大全

附式礼用文章

口 9
421
3 止

小笠原

下三卷

諸禮大全

附式礼用文章

門 津
號 421
卷 3

○式礼用文章目録

一丁ノ	同軍卒既狀	二丁ノ
三	餘寒窺ハ狀	四
五	同返幸	六
七	桑宮尚見舞狀	八
九	八月節白統候狀	十
十一	出度乃礼狀	十一
十二	累見見舞狀	十五
十六	七夕の狀	十七

坪内 氏寄贈

盆の祝儀状	十七	八朔の祝儀状	十八
月見真宴修返れ	十九	見月の状	二十
重九祝儀状	廿一	紅葉見の返事	廿二
亥の子祝儀状	廿三	蟹盃の状	廿四
茶湯中々祝儀状	廿五	日返り	廿六
冬月見奉の状	廿七	日返り	廿八
歳暮祝儀状	廿九	聖旦拜礼忌脱状	三十
婚礼祝儀状	三十一	日返り	三十二
改名祝儀状	三十四	年賀振書状	三十五

日返り	三十一	書法習字の状	三十七
家督祝儀状	三十八	安産祝儀状	三十九
家督海張居の人を祝儀状	四十	元服祝儀状	四十一
養子入家祝儀状	四十二	移住祝儀状	四十三
新宅祝儀状	四十四	安産見舞状	四十五
病氣見舞状	四十六	悔状	四十七
忌中見舞状	四十八	病癒見舞	四十九
孫おけり人々	五十		

○ 月改書書札要例集目録

- | | | | | |
|-------------|---|----------|--------|---|
| 美人の祝料紙を仕出す | 一 | 書状受渡 | 三三三六紙の | 二 |
| 皆冠明りの事 | 二 | 袖の事 | | 二 |
| 美人の祝状の事 | 二 | 名系列形の事 | | 三 |
| 墨練の事 | 三 | 文字接婚の事 | | 四 |
| 文字紙の事 | 四 | 上右左近代替の事 | | 五 |
| 進物別来物教書け事 | 五 | 一筆一書の事 | | 六 |
| 令致仕の事 | 七 | 美換と上中下の事 | | 八 |
| 自分と称する上中下の事 | 九 | 忍性證とし乃事 | | 九 |
| 以上留の事 | 十 | 杉又裏へまりの事 | | 十 |

- | | | | |
|---------|----|-----------|--------|
| 封と目引く事 | 十一 | 消息の教致 | 十二 |
| 脇附返報の事 | 十二 | 綸布勅令右院宣内書 | |
| 御教書奉書く事 | 十三 | 綸布御達の事 | と云の事 |
| 拾と結とれ事 | 十五 | 孔紙の事 | 替れ教致の事 |
| 翁と老との事 | 十七 | 年号月日乃事 | |
| 痛入見舞の事 | 十八 | 言上る事 | |
| 御達の事 | 十九 | 連署の事 | 日封状と云 |
| 換れまの事 | 二十 | 日達乃事 | 稱号の事又西 |
| 深紙の事 | 廿二 | に季相應又まの事 | 九二 |

廿四

九五

廿六

廿七

九八

廿八

三十一

三十一

三十一

三十五

三十六

三十七

三十一

三十九

四十一

五十

數目錄

廿四

九五

廿六

廿七

九八

廿八

三十一

三十一

三十一

三十五

三十六

三十七

三十一

三十九

四十一

五十

數目錄

用文章此書は世に多し一書に近き
 物ありしもの商家諸職の使用俗ものとして
 ともに少くも限おる文を失くし只端的
 書人ありとてども何やまりて其れのみ
 今此式礼用文章を初心のるる卑劣と希
 へる下と知りて又面の性急を免へ化國及び
 文を盡し難しとてふも習ふうち又其り
 の應答其れのみなく又通の問より事
 につき紙等を調る一助と以てなり

書札要例集

[illegible]

武礼園文章

年頃披瀝狀

改曆御衣

不可有休劫沙塵

奉 秘 懷

状の書物中の紙の
 端より書物の文の面を
 三寸六分と厚と月日の書
 三寸六分と厚と月日の書
 宛名とある三寸六分奥の
 紙の裏より不若松文様を
 月日と奥の紙の端より三
 寸六分と厚と月日の書
 を三寸六分の紙の端より三
 寸六分と厚と月日の書
 宛名とある三寸六分奥の
 紙の裏より不若松文様を
 月日と奥の紙の端より三
 寸六分と厚と月日の書

〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事
 〇諸君明候の事

殿様御用儀

御用儀

御用儀

御用儀

御用儀

御用儀

御用儀

御用儀

御用儀

御用儀

かり同軍のやうな
 去勢に用ゐられぬ進
 歩をせよとの物なり
 終と卑下してゐる
 本ふか二重下げて三
 重と云ふ云々附けられ
 同(日通)と云へる人
 終る状は自筆と云ふ
 あつた意の概にけり
 美人(書)へうへ
 ○美人へ奉る状の
 赤きのみとて美人へ
 れぬれを云ふなり却て
 れてまづと云ふては

人の方へ別の中を
 又此れの状態と云ふ
 ぬえと云ふれぬえと
 ぬえれなり
 ○名乗別紙の事
 美人への状は別と云
 らへる居る名乗と云
 中換居へ別名乗を
 がさしぬれと別の一
 帯ありたるが居る
 通り下軍(書)といふ
 名乗別紙と云ふ居る
 左人の教へ一紙に
 の二字と云て下の

同軍の状

新香し御香

奇有体物

法も前様

成法紙束

成法紙束

成法紙束

成法紙束

成法紙束

心月

とる法あれども世に
流るるに

○墨蹟をたれま

夫人の御書は文字を暗せ
ず初めに引つる墨はこく
書下し初めの文と書と
出づるまじり墨と不潔
枯筆とて次の初三を二
久ま石切中入土三か二の石
と筆と添えて三初ま
墨と添えてのけのどく
濃く腐るはか妙極べ
墨は筆よりすい極とい
ふも夫人の御書はと書

とれは必ずを添へ去切
ぬのい人の苗字を村名
佛名圓名村名郷名郡
名の類を外とてるを
きかり

○又字様極幸

紙に書状宛状をよめ
紙のうらをよめ夫人の
夕と書紙をよめつと
てさらへ夫人の人の概
病状は紙のうらぬ
のかりに信
○又字様のつ
ふまかりとつる中

口を

まじり波瀾の

柱は今事意の

沙屋目も

少部内成極

沙屋目も

少部内成極

少部内成極

少部内成極

少部内成極

不吉のやまをきて
又あつたをよめぬと
あつて次は美人の
なごめをよめぬと
意ふふまのふし
つと心と付べ

○ 閑字の事

平出の法

閑字二閑三閑
一閑字とくつとく
多閑字とくつとく
教一閑字のよめぬ
又閑字とくつとく
次のゆれ冠は政殿

閑字のよめぬ
かろ玉梅美人の
のぼる閑字のよめ
又二閑字とくつとく
と閑字のよめぬ
様をよめぬ
閑字のよめぬ
閑字のよめぬ
春宮の閑字のよめ
其閑字のよめぬ
論有閑字のよめ
善閑字のよめぬ
書りたる閑字のよめ

清

正月

餘をよめぬ

餘をよめぬ

餘をよめぬ

餘をよめぬ

餘をよめぬ

餘をよめぬ

餘をよめぬ

餘をよめぬ

土附の熱地の冠が二重より
 引ゆるとこれと平地の底
 とのちがひ

○と云ふは法近代習るる
昔の姓名のよき漢より
進くと改出に弘安年中
これよりをよと云ふ
織田信長の次は儀と
よと云ふ終に近代のよ
恐惶のよをよと云ふに
きよと云ふよと云ふ
深遠く留るよと云ふ
進物列奉物教書の事
よと云ふ進物をよと云ふ



二月

三月留宿候候

よきことばを
よきことばを

たぐひ
法は因循を要せん

をさぐつて
そのまつのしなみ

通る程よくふくた

乃天沙女根内妻

ひいゑ
雅
一
おこ
致
これと
二
一

まゝとよ
こころ
やつの
がと
まて
減教枕草子
つね二

きん さん

三月

の内へ一ねと云附のそなた
 物教をぬゑの一ねと書
 ざり附の二つ地引二天杯
 と物教と脇へあせてお
 かり地を来る物なりへ引
 續地引二天杯二杯と下
 へ引付出のなり
 ○一書一書乃事
 獨作の大方くねと云
 物なりと云ふ一書と
 云ふ二つ出ぬと云ふに
 らざれぬと云ふ一書乃
 字美妙なりと云ふと云
 中なりと云ふの事あるを
 このまじ様かゝ明て事乃
 字を云へ一文字の長き
 いををねと云ふと云ふ何
 方なりと云ふと云ふの
 文字此間の右のまじと
 書なり
 ○今致は文字の事
 致の字方れの上軍用い
 一之れは又近世の致の字
 用軍又用の上軍の字上
 仕と出来たりと云ふ致
 致と云ふ致致遠を云ふ
 今致と云ふ致遠を云ふ
 今致と云ふ致遠を云ふ

日
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

一
 一
 一

今更富村に輩より不用
下輩へ別の来よりけこ
定更のふあり

返振澤地と申すの事
 云々云々書物受仕に次
 美礼美懐被拜見は云々
 云々云々次々美礼令拜見は
 次々美礼書物受仕に
 云々被拜下申すに遂に
 大概かたじけなく

候コウの字ナ并ナ乃ナ字ナ在ナ藏ナ

在捷の事

候うしろの字ふ神かみとと終はるるはは毛け
ののどどくくれれ異い字じとと出でへへくく

どお中にも上座へお出
ふふあがて候と云ふた
作らる作らる衆ふど
そのまをへて去り下へ
つゝさるいふの耐りとして
書へるに○洲のまゝ真
妙妙とて上中下あり
お座の座の上座又同じ
お座の座と云候に座の
まを出てようゝれども
ふあがむとしてお座の
お座と云ふまをへる
おれはまゝのま
と様ふふお座の

ひ
レ
ふ
え
二
ま
か
一

無名氏集

好市人終心

このころまごうのう

落木不横枝

沙市度野

わが遊いっふゆふ

禮

冰生

東家為主人也

まづいへうにあらうれども
け方連判人まき研の状
の悪態年裏とて面うの
ものり信

○女中へのお状の事
女中へのお状の事
をあらうとて一女のこ
とばそとにゆしきり
うのれとてあらく
あふまゝとてあらく
なとてあらく
べーめんきんちうの方
判歌あらうとてあらく
をあらうとてあらく

○封目いく事
タこれの封目いく事
ひるれとてあらく
のへ下軍へ用い来る
づもはてまうじう
當世のあらうとてあらく
をあらうとてあらく
長く引上軍へいど
いく事
○消息乃教款
消息の上下の堅目の様
目トすはとてあらく
字のまゝとてあらく
てまのまゝとてあらく

育種状

蒲草の種

月夜に花をみ

南年とてあらく

神戸の沙汰

秋の夜可なり

花をみゆ

怪しむ

国産の花

常々花をみ



月付一室下げるとあるうよ
 月付一室下げるとあるうよ
 宛の月二室上るをよ軍よ
 中軍と下二室下ぐ一
 月付す三二八とあるうよ
 附の見合せ要ぞう一
 我名とばくと月付はる
 上中下とあるとある一
 書面とあるの向とあるの居
 月とあるとあるの月
 連判の各あるの向とあるの
 近き名とあるの向とあるの
 宛とあるの向とあるの
 ありふれとあるとある

ちうーむう
 月付一室下げるとあるうよ

らと

梅天

き
がく
うじけく
う
き

月付一室下げるとあるうよ
 宛の月二室上るをよ軍よ
 中軍と下二室下ぐ一
 月付す三二八とあるうよ
 附の見合せ要ぞう一
 我名とばくと月付はる
 上中下とあるとある一
 書面とあるの向とあるの居
 月とあるとあるの月
 連判の各あるの向とあるの
 近き名とあるの向とあるの
 宛とあるの向とあるの
 ありふれとあるとある

月付一室下げるとあるうよ
 宛の月二室上るをよ軍よ
 中軍と下二室下ぐ一
 月付す三二八とあるうよ
 附の見合せ要ぞう一
 我名とばくと月付はる
 上中下とあるとある一
 書面とあるの向とあるの居
 月とあるとあるの月
 連判の各あるの向とあるの
 近き名とあるの向とあるの
 宛とあるの向とあるの
 ありふれとあるとある

月付一室下げるとあるうよ
 宛の月二室上るをよ軍よ
 中軍と下二室下ぐ一
 月付す三二八とあるうよ
 附の見合せ要ぞう一
 我名とばくと月付はる
 上中下とあるとある一
 書面とあるの向とあるの居
 月とあるとあるの月
 連判の各あるの向とあるの
 近き名とあるの向とあるの
 宛とあるの向とあるの
 ありふれとあるとある

月付一室下げるとあるうよ
 宛の月二室上るをよ軍よ
 中軍と下二室下ぐ一
 月付す三二八とあるうよ
 附の見合せ要ぞう一
 我名とばくと月付はる
 上中下とあるとある一
 書面とあるの向とあるの居
 月とあるとあるの月
 連判の各あるの向とあるの
 近き名とあるの向とあるの
 宛とあるの向とあるの
 ありふれとあるとある

月付一室下げるとあるうよ
 宛の月二室上るをよ軍よ
 中軍と下二室下ぐ一
 月付す三二八とあるうよ
 附の見合せ要ぞう一
 我名とばくと月付はる
 上中下とあるとある一
 書面とあるの向とあるの居
 月とあるとあるの月
 連判の各あるの向とあるの
 近き名とあるの向とあるの
 宛とあるの向とあるの
 ありふれとあるとある

月付一室下げるとあるうよ
 宛の月二室上るをよ軍よ
 中軍と下二室下ぐ一
 月付す三二八とあるうよ
 附の見合せ要ぞう一
 我名とばくと月付はる
 上中下とあるとある一
 書面とあるの向とあるの居
 月とあるとあるの月
 連判の各あるの向とあるの
 近き名とあるの向とあるの
 宛とあるの向とあるの
 ありふれとあるとある

と云は極上とて名上書

又ハ宿願遂之ハナリ

十月

とえの
公寿
永代

そん
しよ
うじけりふん
そん

号書永年傳

支那

心
 月
 庭
 心
 法
 住

き
う
え
う

依事何能
 三
 一
 二

おとしを産む

倫えん名いの天意と感かんずる書しよ出で

○奉書ハ林宗裏テ内侍

をう
を

三

三

う
の
ら

七

うけたまへ

不月

きく のいへつう
 伊勢

さつ
けい

才

三

○論^{ろん}名^な神^{しん}理^りの^の事^{こと}

○上書之事

をさうに我名成さう
封状の宛不をさすに
我名成出振付をうに
美人へさすに
封状の上出の文箱に
乃妻ゆさう君を
文箱はさう封の振付
て名成をさうに
をさうに

○捻と結との事
 取^ま又^{また}なりと捻の器^{えき}なり
 結^{むす}は^は中^{なかつ}用^{もち}ひなり
 糸^{いと}と結^{むす}は^は糸^{いと}なり
 ○紐^{いし}封^{ふう}の事

盛友

一よきとまふ
 君を人知れず

一筆破之候甚暑

御安否
又

今世の紙と云ふものも
古れの紙封の内封と云
て當時の式はあつたを
板の紙と三つ又切つと
まゝと云つと紙をして
巻て封ト一つと云ふと
包めてと云と折をせ
け状と云ふは是れ今の
紙と云ふは内封
の内封と云ふは

○糊付の状の要

糊付と云ふは今の封状の
みは然るは近來抄や
けは糊付と云ふは

るは紙の紙を切け
切の紙を糊して付
る紙と云ふは諸般人等
まゝに紙の紙の返
書は主人へ達せられ
るは紙の紙を切け
密の紙と云ふは右の
紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ
はすまゝへ達せられ

○紙の紙

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

六月

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ

紙の紙と云ふは内封の状
紙の紙と云ふは紙をま
はすまゝへ達せられ



けれ紙とせしかり
 ○婚れ紙のり
 雲と云ふは長と云ふ
 追ふ跡を尋ねて其の
 趣をいふ○字を書けり
 下筆よりたゞとていふ
 どのふみより裏へ通る
 なるに

○函書河上中下の中
 崩れは棟裏仙洞をいふ
 遷崩は親王河連校と云ふ
 河内界豊河の河軍太
 臣をいふ河軍太河軍太
 の大家をいふ河軍太河

あさぐらて
 雪のやうに見
 まいり
 林を有一枝の
 ぎよ かゝるけり
 沙と云ふは
 まと
 ねねねね
 まふ
 下はとて

林

七のり

あつせきの
 雪のやうに見
 まいり
 林を有一枝の
 ぎよ かゝるけり
 沙と云ふは
 まと
 ねねねね
 まふ
 下はとて

まゝい上事をつゝ死をい
日華といふ遷化の如きと
いふなり

○巻二終この幸

それ法持の格式を用い
て我老より次より
久遠なるをぬりて法
持より次より久遠なる
定め奉れられ

○年月月日と書幸

年月月日と書紙なり

紙に二行とあるなり古れ

は仍る如件宛達め件

の面ありてあるなり今附

は秋法より必に去なり

中山大納言親等の後

の面より後の世より

あるなりは年月月日

とて

○病人兄弟の幸

病人の名平金枝後杯

の面よりあるなり

石段後よりあるなり

と書べきなり

○姓氏を別と幸

世の定より源平後杯の親

とて天よりあるなり

しゝの
世供の如く

とて決

月日

年
親作状

為中へんて健後

伊藤素純一折

とて思ふと毎

とて思ふと毎

とて思ふと毎

とて思ふと毎

七月

新く秋の気配

也初く秋の気配

は使はれぬ庭あり

すはく菊の香あり

赤も何れも秋の気配

沙礼とて秋の気配

八月

月見の気配

月見の気配

先祖の氏より去る氏の字を
姓とせし人別とて我
先祖の傳承する苗字の
氏の字に去る

○二重苗の字

付くとして苗字は以て系
はれり上は姓とて苗字
は傳承するものとあり
又苗字の傳承の公認
をいふれりしと雖も其
公認をいふ神を以て用
ひられし心持あり

○言上之事

をいふ事なり

謹而致言と云何

又秋の傳承の公認を
謹服服する

○御書之事

御書と云ふ二通りあり

云方より入るの御書と

云ふ

謹而致言と云ふ御書は

内書致言と云ふ御書は

可致御書と云ふ御書は

謹服服する

御書と云ふ御書は

御書と云ふ御書は

家老とき辰を御来と
つゝえい返書うぐう書
いゝ外成之こしゝあり
初め披露状のついで
御席に刻て猶状は成
なりぬれぬ系はれり
といふ信懐漢云箇此
誰様にして願付多
中々と云かり

○名乗の服よとのま
を書き
けれ用捨あへゝゝ家
是きくゝる位へなる時の
幸なり

○連署の事
連状の事といふのを
去りうぶる付にはか
かりけ方れ名代連
ねりてけ方の名は月
日より内より一人あとい月日
の外よとへ
○同封と書る事
連状を封してと書る
不しゝるにわづら
いゝい名を封の裏に
表と名乗を法に
て表のけに去る名乗
の人を裏と奥に去

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

ゆききと
ゆききと
ゆききと

様のおまゝと申す中々と分
 つたうゑと云ふまゝ真の
 摺と云ふは石と石の
 空の摺と云ふはお義
 かつ大抵様のおのと摺
 の事摺り下軍と云ふ
 俗に云ふまゝと云ふ

様の用ひやうなはド
なれ様々ふいふ
と下とふふふ

右連休の五やうと曰ふ

但に福狀は忍收得ま
し。又竹とて書え留
宛不皆履去たり。又に
石を去たり。眞^{まこと}書^{いひ}紙
を去りしあり。石府に
次^{つぎ}石府と出て石府
を去りしあり。

○月讀のり

今時連刺の要は身を
くけく^{まひ}て人の器^{うぐい}を
おれ^ちの^ちの信^{しん}を
たう^{たう}と^とな^なき^きい^いま^ま人^{にん}
等の^と信^{しん}を^をわ^わか^かせ^せと^とい^いふ^ふ
の^の右^{みぎ}の^の服^{ふく}を^を奉^{ほう}の^の字^じを

沙雷別成沙社

五言古詩
東坡先生

サ
ル
え
ど
き
ん
な

幸さぐのそのつたふく

通曰

調物之書

そのあとのこと

調物年張

子
 也
 子
 子
 子
 子

傳下永知傳

孫
ん
ぞう
うけたまひあはせ

此原木乃金匠

飛
心
押

是一夜

と一々の名を
くろくともく
那のてくまう
くはくはく
○称号のす

武家の名を
云家その称号
名の名を
○又母兄弟の方

父母一人は
また利を
兄もは
の中
のふと

まの半
いふと
○深紙の
深紙の

てら
るは
○月安
名
おれ
まの
も
安

おれ

月

市

市

市

市

市

市

市

九月

書をふくむて二通

てはてぬれり

○儒状のり

るのりし但し大なる

儒状の家老の名刺を

係用報るの合而何

貫目と云ふ同よ人の

刺を押しこれと御神

と云

○にき相應のふとの

南中の状は其暑熱

暑と書べしと用ひ残

暑ともいひ月の日

冷も候と十月の

次方へき

其をとも

候と云ふ

元之必

○産を

死の

御

様

内

の

状

は

三

候

七

候

の

を

付

て

と

云

紅葉の候

きし

の

の

の

の

の

の

の

の



面を搥又結又うろー
切串又て中巻の法
のみなり

○吊状之事
贈送をあげて不幸の
人の名を書物二紙目に
に字をうつとて拈筆して
に字をうつとて拈筆して
の付又限るゝ又纏又書そ
行方より墨線のみぬか
う書んぬとて用ひざるの
なり尚く又々筆を返さ
ぬかやう此字と云書
面書留も拈筆と云を際

目 め 心 こころ なる なる 何 なん 依 よ る て
 そ まつ の ぢう の うら
 康 か 来 き く 一 いち 重 じゆう く 内 ない
 沙 さ と 活 かつ 今 いま ん 定 ぢやう る て
 か か ん ん の の ま ま ま ま
 未 み 何 なん く 渡 わたり と 心 こころ
 律 りつ

十月

緊要文

一筆破^{えんえん}と伝^{えん}ふ

ど宛を綴付はし封状
に度々紙とお包之様々
綴又ハハより夢て目付の
奥又宛宛而去之様々ハ丸
綴之封付るハ宛宛引之
メ者人常々ハ綴

○是書の中へ
 又は是と云ふ書なりと
 物へ負^{いんぶ}教と云ふ是と
 いふ之堅紙^{こうみ}と云ふ是書なり
 嬌^{こゝろ}れの及ふ末を以て是
 去後者往^{いやく}付進物教^{あき}ま
 先方大勢の付^つ淮^え換^かへ何
 淮^え換^かへ何と堅紙^{こうみ}換^か紙^し

又月日不玄とあり

○^{ろく} 往々書目録ある

には後文と不共なり
 然れ細工人の物と能く耐
 世と一日後文と云ふは
 法の外なり進物と
 孝貞の時むじか後文の
 増え後文と不共目録の
 増え目録と不共後文の字
 は記と云後文の字はあ
 やと讀て其不を要細と
 云ふは後文と云ふは
 一書あり目録と云ふは

万
地
国
度
氏

志々々
 何ん
 志々々
 何ん

りろくの
國縁を
通る者

よく
そう
まい
せ
あげ

五ノ板成ふに

られ二

永年堂

和月

しやのゆきしつうる
茶酒せう

以二使一孔一海二子一

りえ
 どん
 え
 の
 ぐ
 いよく
 甚く其をくちく

あ
え
う
ちんちん

目録とある一書と
 なく物の名目斗ある
 を目録といふ目録
 録の記の名目斗ある
 光の光とある一書と
 とある一書と物名
 目とある一書と
 目録は又美書といふ
 三條の品ある女中
 の目録とある一書と
 半一にありあると
 るありある各別之男
 女○或人の名目
 ある一書と目録と

目録とある一書と
 なく物の名目斗ある
 を目録といふ目録
 録の記の名目斗ある
 光の光とある一書と
 とある一書と物名
 目とある一書と
 目録は又美書といふ
 三條の品ある女中
 の目録とある一書と
 半一にありあると
 るありある各別之男
 女○或人の名目
 ある一書と目録と

目録とある一書と
 なく物の名目斗ある
 を目録といふ目録
 録の記の名目斗ある
 光の光とある一書と
 とある一書と物名
 目とある一書と
 目録は又美書といふ
 三條の品ある女中
 の目録とある一書と
 半一にありあると
 るありある各別之男
 女○或人の名目
 ある一書と目録と

目録とある一書と
 なく物の名目斗ある
 を目録といふ目録
 録の記の名目斗ある
 光の光とある一書と
 とある一書と物名
 目とある一書と
 目録は又美書といふ
 三條の品ある女中
 の目録とある一書と
 半一にありあると
 るありある各別之男
 女○或人の名目
 ある一書と目録と

堅い己の字は折れぬと云
 後人の又後文目録の
 には目録不玄法之又進と
 いふ程と云ふは以て此の
 程なりと心切ぐ右を
 法をききと二枚と
 紙より目録のとの紙と
 右は一表の方又表の
 通河馬代黄令十と云
 法元年と云て年号
 月日名刺書の上と宛
 不後者の名け方の奏
 者の名なり

○香眞目録の事

これの紙を枚々書抄
 するものをきくらん
 書を忌の附にきくらん
 三年と云の書の中を
 此の紙をきくらんを
 書換函にきくらん
 まてい金根をきくらん
 尊と云七面忌と後
 遠忌と云これと云
 眞の金根をきくらん
 不調包根と云た函
 此の函のあり
 ○送物目録の事
 料紙に二枚と云ふ

是の
 金
 金
 金

金
 金
 金

金
 金
 金

金
 金
 金

金
 金
 金

金
 金
 金

金

金

金
 金
 金

金
 金
 金

至美人のなるは女
てく進上を去る下通り
か己又の名を宮達物を
書へり同じ進上文字の
間へ去へり刀服指を針
掛物茶を竹とて去へ
てらとを去相續のまは
通りをり

○云々卿分別の事
云々機家と臣をヤハる
卿の参議とをり
○宮云達若若殿
分別の事
宮の天の御子をヤハる

云々達機家と臣の御子
若君の云方御軍の御子
中若殿の諸大名の御子
の事をいふなり
○箱肴曲物と書付ぬ
箱肴は式法に堅本より
鯛とて去るなり
その板と板板同とて去る
るは是れとて去るなり
幅の狭きものは堅板用と
ありありとて去るなり
十文字のけるは細とて
らぬなり書物とて曲物と
同を定取とて大と

山深家は山國

ふゆたは山國

まね依り人來

鶴印とて山國

いん山國

山國

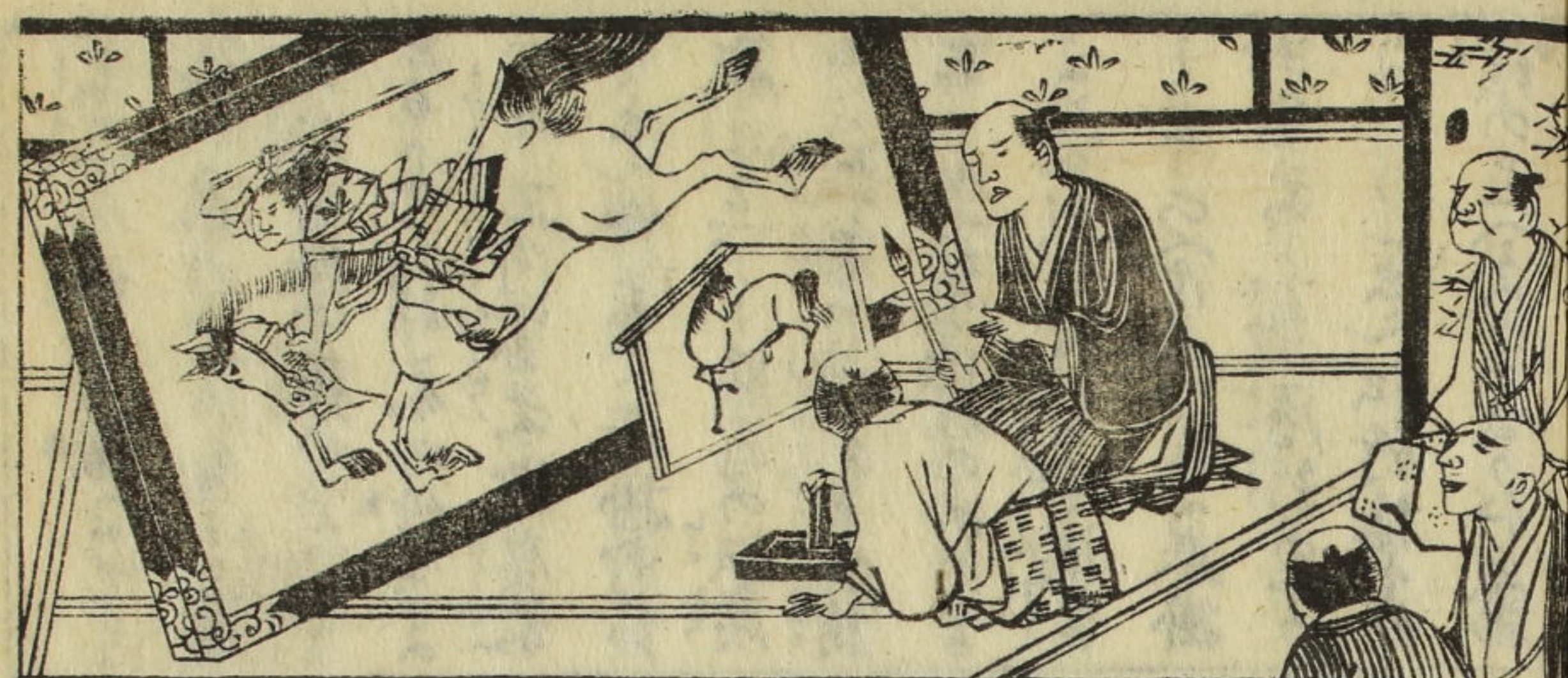
山國

月日

山國

山國

とう指一ツ三ツと伏せ
 て茶碗或いぬ種をく
 ぶー 菱形の雄多別
 肝要かるく美人なる時
 同縁流は和のと進上
 と石玄干綱錫と斗り
 書べー同縁流さうな
 進とせー
 ○俳佛者歌のす
 俳者の鑑板佛者も様
 板なり毛平人の七法也
 震頼い其法は
 ○繪馬ふま書付のま
 馬の儀多人物屋神芝



者をくくたて
 流山集
 流花集
 流る流る
 好者一好也
 示在何れ
 流花集
 流花集
 流花集

示在何れ
 流花集
 流花集
 流花集
 流花集
 流花集

示在何れ
 流花集

あり奉号月日の張の張
の方をせしむに教をたて奉
教向とて出願書表名を
とて一松本付をのふと
おの儀人の風之官位五人
おの儀は後下奉承を改め
又奉承性も改め奉り尤も
べし安否も不及之御佛を
た宝氣宝殿とてその宝の
まへに奉り奉る心之御の湯
火奉りて奉承の字と進
候成之佛の陰の成殿と
出願の字のみありとて候
どうとてぬいとて陰とて

下石與

瑞月

石上玉梅 弘長
 文

一筆

新殿祿堂御紙

秋も廣希と云ふ内
 陣の弓一技をに方々定
 る法と云ふと廣希と云ふ大社
 の内陣の弓一技に方の他法
 と云ふも奉掛流家系と云
 ふれば此の弓のちうひま
 ば他より
 〇礼物と進物のちのち
 あつたつたの祝言式目
 の付或いお家或い人を
 てきんをいふ進物のち
 のちう物を信より
 信物の幸なり

〇多目の車
 多目の庶人との祝言
 をき繩とて貴うるを二
 貴族とのふ府にのきた
 一ちうやうはして指し
 だしを他法に信
 〇持代ののち
 是の進代の畧れなり
 今更ら初めを他法に
 金より百正と云ふ押
 形の中におて内衣の
 金よりをのうと付と云
 ふ金銀百正と云ふ指輪
 に添ひ目録とてきん

秋も廣希と云ふ内
 陣の弓一技をに方々定
 る法と云ふと廣希と云ふ大社
 の内陣の弓一技に方の他法
 と云ふも奉掛流家系と云
 ふれば此の弓のちうひま
 ば他より
 〇礼物と進物のちのち
 あつたつたの祝言式目
 の付或いお家或い人を
 てきんをいふ進物のち
 のちう物を信より
 信物の幸なり

秋も廣希と云ふ内
 陣の弓一技をに方々定
 る法と云ふと廣希と云ふ大社
 の内陣の弓一技に方の他法
 と云ふも奉掛流家系と云
 ふれば此の弓のちうひま
 ば他より
 〇礼物と進物のちのち
 あつたつたの祝言式目
 の付或いお家或い人を
 てきんをいふ進物のち
 のちう物を信より
 信物の幸なり

○^{うとうとう}免る摺書状の事

龍虎豹白虎の義實ホ
羅子より希に去之と云

六二 否 有 石 窒 一 打 与

芝多んき

まゝづて けん せうの ところ

えど
ろを
ぶーひとさう

まゝ
亭
ぎ

志

522

三才圖會

○人の子出さの附名と付す
又面々^{めんめん}惚々^{とつとつ}々々^{とつとつ}々々^{とつとつ}
然^{しか}止^と然^{しか}止^と然^{しか}止^と然^{しか}止^と

後、^いの^い孫^い衛^い事^い算^い長^い久^い
 三^い月^い如^い友^いの^い世^い相^い漢^い云^い松^い
 と云^い宛^い不^い月^い中^い熊^い吉^い友^い
 あり^い又^い云^い云^い何^いの^いう^い付^いの^い
 紙^い一^いを^い撰^いと^いお^い平^い生^い進^い上^い
 と云^い不^い一^い日^い中^い事^いなら^いど^い事^い
 算^い事^い名^いと云^い中^いの^いお^い月^い
 と云^い孫^いの^い熊^い吉^い郎^いと
 云^い奥^いの^いお^い年^い号^い月^い日^い名^い
 付^い親^いの^い苗^い字^い名^いと云^いあり^い
 宛^い不^い又^い及び^いに
 ○^い扇^い子^いの^い事^い
 箱^いの^いま^いう^いの^い進^い物^いの^い付^い也^い
 礼^い物^いの^い付^いの^い扇^い又^い二^い本^いを^い

[illegible]

あうり
二
さ
つ
は
え
し
た
を

そうけいよ
み
新人の

[illegible]

網 紅 粉 面 土 付

可中謝心續

得月

曾見親狀

一筆波世之怪

と 収 漢 礼 記 卷 第 一

水引とて結び合しては
く之結びやうある一本の
きいぬと又教多くいせ
さうなる

○二束一本のす

その法中のれをう鹿の
本を包むぐ一包やう
あり世より大方の鹿を包
まじしてあるうう
九人より初めてある附の
れ物の大方右のふり限
る

摺者の事

大概祝儀木のうりやう

一打二種二打三種とる
一摺り本式にのてく

を耳入ちうり白木より
まらび縄とて巻平摺
まらうを柳摺とて平
摺よりを山摺とて摺の
まきを南摺とて平摺
まらう用也板とて摺う
を本摺とてはし本摺
とてまらうは摺

○摺のす

摺のえやうの大方に
縁のふり

○刀腹指代事

改元祝儀状

目録及事務関係

海魚利致進言

気象致候

少府及事務関係

改元祝儀状

一筆書とては

今致祝儀状

改元祝儀状

事務関係



新分のるをなむの機
 腰に基よと入箱へる
 りあぐにしろるは
 臺よとゆるるあぐ
 比度蓋ふ小袖の上
 りあり
 ○長るもの
 弓強長刀をさしこ
 りあぐの臺よと入箱
 陰多一張一箱より百
 ままでもえりあぐ
 ○矢の
 これ一ひかみよとの
 物に数多き箱へる

沙汰はんねん千艘
 一石進とくは
 戒大のねんま
 海とくひのねんま
 花とく

月日

年賀状

沙汰はんねん千艘
 一石進とくは
 戒大のねんま
 海とくひのねんま
 花とく

とんふに編て臺に居
るしあう

○武具馬のつ

此親の臺より入てう
時宜ん台せうべー

○かゝ糸れ幸

秘ぢたるうゝていゝま
のを先へ物てはひ

一松たうれは積又二股

ふしつむし臺小きこ板

形より大きとまを二

だんらぐ積だー

○職の幸

背の方を先へたるま

していくつものう二股

もあらぶー縁さるぬ

いざると男と女と少しち

ひあれどもはぐちほし

てうじうじ

○丁子入の敷のつ

かゝれ物に臺は板板

積るはしれども近世

ふくかゝれ物に積

ふまゝとんまゝがう時宜

ふまゝ板たうれつゝ

狎うじきちう

○沈香のつ

名番あらはつゝ

後じん才其日の子

沙汰進とち夜る

辛し時ふ茶末も

右の葉内はひく

月日

月日

せん市人法と

せん市人法と

せん市人法と

せん市人法と

名番よりいづれいつて
うへ

○巻の羽の幸

然るても勝の尾とて

巻の羽の幸

○虎豹の虎の巻の皮

希に深草のり

巻の皮の巻の巻の巻

よくいづれを我れへは

て小袖のてく並つて

○巻の巻の巻の巻

希に深草のり

巻の巻の巻の巻

て小袖のてく並つて

○巻の巻の巻の巻

希に深草のり

巻の巻の巻の巻

て小袖のてく並つて

○巻の巻の巻の巻

希に深草のり

巻の巻の巻の巻

て小袖のてく並つて

○巻の巻の巻の巻

希に深草のり

巻の巻の巻の巻

て小袖のてく並つて

○巻の巻の巻の巻

希に深草のり

巻の巻の巻の巻

左ん来世の日も夜

右ん来世の日も夜

左ん来世の日も夜

右ん来世の日も夜

左ん来世の日も夜

右ん来世の日も夜

左ん来世の日も夜

右ん来世の日も夜

左ん来世の日も夜

右ん来世の日も夜

○紙の色む物色もさう
物のさ

紙の色むてお應えする物
不お應え物何うか
危丁生腰箱小刀刺刀
もも掛るもの
い色むて墨よとては
又色むて墨よとては
こく相應不相應を
見合せ分別するもの
の肝要なり

推福曲物去揚降
手箱入へるもの
別々事

糟漬味噌漬鮎のたぐい
漬るるー干鮎干鮎
おれおれ節多し
ここのちちちち
鮎の云物砂糖その外干
菓は曲物とては
おれとては
手箱解き其蓋
の蓋とては
あるは及びけぬ
りてある

○毒物真殺毒
黄金十両は金
その白根十両は根

ふくし遠月水度

沙放門ん丁

厚志を何ん

決

月

おれおれ文

今度沙放門

おれおれ

昨ん沙使

沙使

不奇書字の事

目強の端と目強兵一
の字と一ツ書・私の他法
授の字・美人への状と月
の字・実名・実名をいれ
斗・云方よく云用と極
解・呉服・此の字・
先生に授の字・生・
生の字・け方・
意味・貴・又返り
酒肴食・
既の字・
又ツの字を付る・
一二の字・
又母・又者人母者人二人
の字・相の字・
服・
言・
言・
日・
女・
たり・
ら・
べー・
ら・

下三三

沙使化

花一様鮮重

良

清酒は

集候

を

月日

家持

秋夜

付

下三三



○備歷諸狀之事

一何と問何屋誰及出付
屋誰と申仁借屋仕在者
ア以仁生國主何國何村
之生云先祖惟如仁そ
我未能存知れ成務人云
立中以商量何を以て
事や以
即云儀孫御法度之切死丹
又武士之浪人等々此は
後先親等の伯祖の教条
御法度之録に於て也
所以云協奏諸藩願托
其事外ひと人に與ふ

辞退成
 成
 成
 成

首尾印板人受

沙源店 沙源店 沙源店

め
ん
そ
く
し
つ
け

い
ら
ん
ら
く
の
こ
こ

重刊國朝文獻

右欽王度

之

月八

元祐元年

○備后送り一札

一付屋瀬中仁兵衛主
我由家備宅に於て
勝を付て方及家
留に中いむけ方備宅
之内金銀出入不
下他方指構出入
付の意送り一札
中仁兵衛主

年号 付町 付屋瀬

○多山人法然主事

一付町主事若何付月
付月主事切に奉
進中いし者生國
付町付町主事若
主事先祖祖
以我我主事人
船主也

一付屋瀬中仁兵衛主
我由家備宅に於て
勝を付て方及家
留に中いむけ方備宅
之内金銀出入不
下他方指構出入
付の意送り一札
中仁兵衛主

多山人法然主事

付町主事若何付月

付月主事切に奉

進中いし者生國

付町付町主事若

主事先祖祖

以我我主事人

船主也

一付屋瀬中仁兵衛主

我由家備宅に於て

そおけ者付ゆ候し亡
々爰出来仕はれ我等何
方ともし出急度地明
美及少我中難無市
お海よりいお後日信候
依るし件

西
信人 准平
多入 准平

年号月日

何屋准后

○銀中銀子之事

一銀百八拾貫目也

右之銀子銀り不実之是

何時に在り入用次第急

度返却するに為候日

銀中銀子之事

備
右判

年号月日

何屋准后

○銀中銀子之事

一銀百八拾貫目也

右之銀子銀り不実之是

何時に在り入用次第急

度返却するに為候日

銀中銀子之事

一銀百八拾貫目也

右之銀子銀り不実之是

何時に在り入用次第急

度返却するに為候日

白銀指板少下金

不及家上本夕酒

仁美少下

大次郎傳玄

月日

新宅信文

一、年寄と信文

二、新宅信文

三、新宅信文

下、新宅信文

五

車
 馬
 作
 之
 乃
 麻
 束

我々若水庵中上は右
捨紙急度おまゐり
願ふに御座り
右へ通お達せられ
けお察し上は後日お
そ紙お察しお察し
Pは後日御座り

○星子紙一札
そ方より事お察し
一年お紙お察し
幼紙お察し
中お察し
そもお察し
一紙お察し

乳汁不足仕付
以九一云々
お紙お察し
○不通紙一札
所自紙
度紙
費紙
代紙
来何月
お紙お察し
お紙お察し
お紙お察し

沙者種紙紙

中紙紙紙紙

細紙紙紙紙

不備

月か

病者人紙紙

一年紙紙紙紙

そ紙紙紙紙

口不紙紙紙紙

紙紙紙紙紙紙

若月止仕度も去りし
も御身寄を懐懐
一切仕る後日
依る由件

○懐懐之事

我亦流式之者中家
後酒標懐懐高貴元且
銀子有貴同惣銀を
懐与々云々其山明
次男跡市に横町之
裏懐懐元銀入捨目
其後懐懐元右之外
付方分我御遠元
一云々物中者云々
為後日懐懐元

○我亦流式之者中家

一付通行町表付同裏
外二十回南隣付金
小溝ハ付某右之
後丁銀行貴目付金
及永代懐懐元不
正也付金付付方
も遠元坊中者云々
後者中懐懐元不
其来仕元利元者
其急急急急急
少者少者少者
為後日懐懐元

ツサハ多々度
あつてそまつの

此の麻糸も
えども中へんいつと

少片のたき
進と休む

進と休む
あつてそまつの

此の麻糸も
えども中へんいつと

とつて

月日

病状文

沙尤又様沙
とつてそまつの

とつてそまつの

吹響人名列
諸人名列
要人名列

年月日

誰友

○家屋敷要状

行通行所付屋誰友
家屋敷表は行同裏
新町並右の家屋敷
丁銀付費用、何屋誰
要り中いけ仁宗命志
何宗より先祖分帳帳
中付私債人々、其
要り中いけ仁と付

外に構敷ありと云、拙者
左様申意、要り中明中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

年号月日 要り中

あひまひ
あん
あひまひ
あん
あひまひ
あん

あひまひ
あん
あひまひ
あん
あひまひ
あん

あひまひ
あん
あひまひ
あん
あひまひ
あん

あひまひ
あん
あひまひ
あん
あひまひ
あん

月日

月日

あひまひ
あん
あひまひ
あん
あひまひ
あん

あひまひ
あん
あひまひ
あん
あひまひ
あん

あひまひ
あん
あひまひ
あん
あひまひ
あん

あひまひ
あん
あひまひ
あん
あひまひ
あん

付貴同、惟及、永代、
後中、要、安、近、在、田、地、
付、安、近、遠、近、中、希、不、可、
お、ま、い、一、坊、い、者、在、
こ、い、我、急、安、坊、明、
そ、い、後、中、後、日、田、地、
賣、券、状、め、件、

後人 在判
年号月日 在判
惟及 系

書状、法、長、子、形、
一、系、那、惟、及、中、下、り、
合、ま、い、書、状、を、通、番、
紙、包、ま、い、お、座、帳、法、

合、合、何、百、也、
右、も、付、合、惟、及、中、金、致、
の、智、帳、法、長、子、い、け、代、
合、致、い、居、大、傳、中、所、河、川、
付、座、帳、の、及、法、法、長、
そ、い、い、系、目、限、を、お、遠、
後、中、そ、い、い、の、後、日、
の、智、子、形、後、安、件、

年号月日
箱根切子

一行、國、付、町、付、合、惟、日、
付、某、ら、上、式、入、付、國、と、

ひ、突、大、至、系、子、る、志、

進、上、は、御、堂、市、

沙、見、拜、し、決、と、

く、拜、し、御、堂、市、

月日

花、信、人、と、文、

一、系、那、惟、及、中、

右、殿、様、御、座、帳、收、

左、殿、様、御、座、帳、收、

右、殿、様、御、座、帳、收、

左、殿、様、御、座、帳、收、

五通
御国所々相遠通
上様下様いふも
文書

年号月日
箱根
御番所様

遠方通達之由
諸君之御教
大切之事
毎々付帳
御字を
一二の字を

月乃 吳名
正月 暮 正月 暮
二月 仲 暮 正月 暮
三月 暮 正月 暮
四月 仲 暮 正月 暮
五月 仲 暮 正月 暮
六月 暮 正月 暮
七月 仲 暮 正月 暮
八月 仲 暮 正月 暮
九月 暮 正月 暮
十月 仲 暮 正月 暮
十一月 暮 正月 暮
十二月 暮 正月 暮

中々及法信者進就

中々及法信者進就

中々及法信者進就

中々及法信者進就

月日

凍解

中々及法信者進就

中々及法信者進就

中々及法信者進就

中々及法信者進就

子トウ	西トウ	寅ト
卯ト	辰ト	巳ト
未ト	申ト	
酉ト		
戌ト		
亥ト		

依
服
重
二
丈

男水女木

男火	女土	男木	女火
男金	女水	男土	女金

男水女火

男火	女金	男木	女土
男金	女木	男土	女水

男水女金

男火	女木
男金	女土
男土	女火
男水	女金

男水女土

男金	女火
男火	女水
男土	女木
男木	女金

男水
女水

男火	女火	男木	女木
男金	女金	男土	女土

京都

三條通河幸町

衣野仁玄清

日本橋南亭丁角

須臾登茂玄圃

江

日午橋南武丁園

山城隱居

中橋廣小路町

西宮殿

南本所考丁月

檣皮色赤次白

大坂

人無橋通水之患

河內府志

人每通考所

河內陸氏去清

